

K270.8

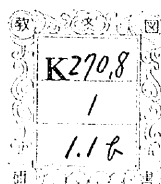
1

1.1b

文部省著作教科書

高等國語 一上

文部省



高等國語 一上

文部省



## 目 録

|             |    |
|-------------|----|
| 一 藤村詩抄      | 一  |
| 二 笛吹川をさかのぼる | 一五 |
| 三 太郎冠者      | 六  |
| 四 記録映画の幻想性  | 三  |
| 五 東海道五十三次   | 六  |
| 附 録 國語學習の手引 | 六  |

## 一 藤村詩抄

島崎藤村

### 自序

若菜集、一葉舟、夏草、落梅集の四巻をまとめて合本の詩集をつくりし時に

つひに、新しき詩歌の時は來たりぬ。

そはうつくしきあけぼののごとくなりき。あるものはいにしへの預言者のごとく叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。

うらわかき想像は長き眠りより覺めて、民俗のことばを飾れり。

傳説は再びよみがへりぬ。自然は再び新しき色を帯びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照らせり。過去の壯大と衰頹とを照らせり。

新しきうたびとの群れの多くは、たゞ穠実なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき。不完全なりき。されどまた偽りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらのくちびるにあふれ、感激の涙はかれらのほくをつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をしてほとんど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの声に和しぬ。

詩歌は靜かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌をおどき苦悶の告白なる。なげきと、わづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。

さうかなる活動に励まされてわれも身と心とを救ひしなり。  
たれかふるき生涯に安んぜんとするものぞ。おのがじし新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつ  
とめなる。生命は力なり。力は声なり。声はことばなり。新しきことばは即ち新しき生涯なり。  
われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過ごしぬ。  
藝術はわが願ひなり。されどわれは藝術を軽く見たりき。むしろわれは藝術を第二の人生と見たり  
き。また第二の自然とも見たりき。

あゝ詩歌はわれにとりてみづから責むるのむちにてありき。わが若き胸はあふれて、花も香もなき  
根無草四つの巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友  
とする人々のまへにさゝげんとはするなり。

明治三十七年の夏

藤村

序のうた

心なき歌のしらべは  
ひとよさのぶだうのごとし  
なさけある手にも摘まれて  
あたゝかき酒となるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる  
紫のそれにあらねど  
こゝろある人のなさけに  
かげにおくふさの三つ四つ

そは歌の若きゆゑなり  
味はひも色も浅くて  
おほかたはかみて捨つべき  
うたゝねの夢のそらごと

はとにふまれてやはらかき  
草とならばやあけぼのの

草とならばや

あけぼの 碧茶集

くれなゐ細くたなびける  
雲とならばやあけぼのの  
雲とならばや

わきてながるる

やほじほの

そこにいざよふ

うみの翠

しらべもふかし

もゝかはの

よろづのなみを

よびあつめ

ときみちくれば

うらゝかに

とほくきこゆる

はるのしほのね

やみを出でては光ある  
空とならばやあけぼのの  
空とならばや

春の光をいろどれる  
水とならばやあけぼのの  
水とならばや

秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に

尾花みだれて秋風ぞふく

しづかにきたる秋風の  
西の海より吹き起り  
舞ひたちさわぐしらくもの  
飛びて行くへも見ゆるかな

ゆふかけ高く秋は黄の  
きりのこずゑの琴の音に  
そのおとなひを聞くときは  
風のきたると知られけり

ゆふべ西風吹き落ちて  
あさ秋の葉の窓に入り  
あさ秋風の吹きよせて  
ゆふべのうづら巢に隠る

ふりさけ見れば青山も  
色はもみぢに染めかへて  
霜葉をかへす秋風の  
空の鏡にあらはれぬ

すゞしいかなや西風の  
まづ秋の葉を吹けるとき  
さびしいかなや秋風の  
かのもみぢ葉にきたるとき

道を傳ふる婆羅門の  
西に東に散るごとく  
吹きたゞよはす秋風に  
ひるがへり行く木の葉かな

朝羽うちふるわしたかの  
あけぐれそらをゆくごとく  
いたくも吹ける秋風の  
羽に声あり力あり

見ればかしこし西風の  
山の木の葉をはらふとき  
悲しいかなや秋風の  
秋の百葉を落すとき

人は剣を振るへども  
げにかぞふればかざりあり

わしの歌 一葉舟

みるめの草は青くして海のうしほの香にほひ  
流れ藻の葉はむすぼれてあまの小舟にこがるるも  
あしたゆふべのさだめなき大龍神の見る夢の  
暗きあらしに驚けば海原とくもかはりつゝ

舌は時世をのゝしるも  
声はたちまち滅ぶめり

高くも烈し野も山も  
いぶきまどほす秋風よ  
世をかれゝとなすまでは  
吹きもやむべきはひなし

あゝうらさびし天地の  
つぼのうちなる秋の日や  
落ち葉とともにひるがへる  
風の行くへをたれか知る

とくたちかへれ夏波に友よびかはす浜千鳥  
もしほやく火はきえはてて岩にひそめるかもめどり  
あまはとまやに舟はいそいそうちよする波ぎはの  
けづりて高き岩角にしばし身をよす二羽のわし

いかづちの火の岩に落ち波間に落ちて消ゆるまも  
寝みだれ髪か黒雲の風にふかれつそらに飛び  
ぶだうの酒の濃紫いろこそ似たれ荒波の  
波のみだれて狂ひよるひびきの高くすさまじや

翼の骨をそばだててすがたをつゝむ若わしの  
身は覆羽やさごろもや腋羽のうちにかくせども  
見よ老いわしはそこ白く赤すぢたてる大つめに  
岩をつかみて中高き頭靜かにながめけり

げに白髪のものゝふの劍の霜を拂ふごと  
からあゐの花ますらをのかの青雲を慕ふごと  
もみちの影になくしかの谷間の水にあへぐごと

眼鏡く老いわしは雲の行くへをのぞむかな

わが若わしはうちひそみわが老いわしはたちあがり  
小河に映る明星の澄めるに似たる眼して  
黒雲の行く大空のあなたにむかひうめきしが  
いづれこゝろのおくれたり高し烈しとさだむべき

わが若わしは琴柱尾や胸にあやなすしぎの斑の  
承毛は白くやはらかに谷の落し羽飛ぶときも  
わきて流るるましみづの水に翼をうちひたし  
このめるかげは行く春のなごりにさける花つゝじ

わが老いわしは肩つよく胸腹廣くあふれいで  
烈しき風をうちしのぐ羽はしるくもあらはれて  
ふちの花かも胸の斑やもゝによるひをおくごとく  
鳥の命の戦ひに翼にかゝる老いの霜

げにかめしきものゝふの盾にもいづれ翼をば

張りひろげたる老いわしのふたゝびみたび羽ばたきて  
をどれる胸は海潮のわきつ流れつ鳴れごとく  
力あふれて空高く舞ひたちあがるすがたかな

黒岩だけの岩ばなに生ふにも似るか若わしの  
岩角ふかく身をよせて飛ぶ老いわしをうかゞふに  
紋は花びし舞ひ扇ひらめきかへる疾風の  
わが老いわしを吹くさまは一葉を振るに似たりけり

たゝかふためにうまれては羽を剣の老いわしの  
うたむかたむとをやみなき熱き胸より吹く息は  
色くれなゐのほのかもげに悲しみのわきあがり  
つよき翼をひるがへしかの天雲をしのぎけり

光を慕ふ身なれどもさだめかなしや老い鳥の  
一こそ深き苦しみのおとをみそらに残しおき  
金糸のぬひの黒じゆすの帯かとぞ見る黒雲の  
羽そでのうちにつつまれて姿はいつか消えにけり

あゝさだめなき大空のけしきのとくもかはりゆき  
暗きあらしのをさまりて光にかへる海原や  
細くかゝれる彩雲はゆかりの色の濃紫  
薄紫のうつろひに樂しき園となりけらし

命を岩につなぎては細くも糸をかけとめて  
腋羽につつま頭をばうちもたげたる若わしの  
鉤にも似たるつま先の雨にぬれたる岩ばなに  
かたかつきたる一つ羽はそれもなごりか老いわしの

霜ふりかゝる老いわしの一羽をくはへながむれば  
夏の光にてらされて岩根にひびく高潮の  
碎けて深き海原の岩角に立つ若わしは  
日影にうつる雲さして行くへもしれず飛ぶやかなたへ

うぐひす 夏草

さはれ空しきさへづりは  
すゝめの群れにまかせてよ

うたふをきけやうぐひすの  
すぎこしかたの思ひでを

はじめて谷を出でしとき  
北風寒くあられふり  
うちに望みはあふるれど  
行くへは雲に隠れてき

露は緑の羽を開ち  
霜はつばさの花となる  
あしたに野べの雪をかみ  
ゆふべに谷の水を飲む

さむさにつめも凍りはて  
絶えなむとするたびごとに  
またあらたなる世にいでて  
くしきいのちに帰りけり  
あゝ枯れぎくにまくらして  
冬のなげきをしらざれば  
たが身にとめむ吹く風に

にほひ乱るるうめが香を

谷間のさゝの葉を分けて  
凍れる露を飲まざれば  
たが身にしみむ白雪の  
下にもえ立つ若草を

げに春の日ののどけさは  
暗くて過ぎし冬の目を  
思ひ忍べる時にこそ  
いや楽しくもあるべけれ

うめのこぞめの花がさを  
かざしつ酔ひつうたひつゝ  
さらば春風吹き來たる  
にほひの國に飛びて遊ばむ

千曲川旅情の歌 落梅集

一

小諸なる古城のほとり  
雲白く遊子悲しむ  
緑なすはこへはもえず  
若草もしくによしなし  
しろがねのふすまのをかへ  
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど  
野に満つるかをりも知らず  
浅くのみ春はかすみて  
麦の色わづかに青し  
旅人の群れはいくつか  
畑中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず  
歌かなし佐久の草笛  
千曲川いざよふ波の

岸近き宿にのぼりつ  
濁り酒濁れる飲みて  
草まぐらしばし慰む

二

きのふまたかくてありけり  
けふもまたかくてありなむ  
この命なにをあくせく  
あすをのみ思ひわづらふ

いくたびか榮枯の夢の  
消え残る谷にくだりて  
河波のいざよふ見れば  
砂まじり水巻き帰る

あゝ古城なにをか語り  
岸の波なにをか答ふ  
いにし世を靜かに思へ

百年もきのふのごとし

千曲川やなぎかすみて  
春浅く水流れたり  
たゞひとり岩をめぐりて  
この岸にうれひをつなぐ

労働雑詠

晝

たれか知るべき秋の葉の  
落ちて樹の根の埋むとき  
重く声なき石の下  
清水あふれて流るとは

たれか知るべき小山田の  
稻穂のたわにみるとき  
花なく香なき賤の胸  
いのち踊りてひびくとは

野べの琥珀を鳴らすかな  
刈り乾せ刈り乾せ稻の穂を

左手に稻をつかむ時  
右手に利鎌を握る時  
胸満ちくれば火のごとく  
骨と髓との燃ゆる時

土とあくととどろの上に  
汗とあぶらの落つる時  
縁にまじる黄の莖に  
烈しき息のかゝる時

ともに來てまき來て植ゑし  
田の面に秋の風落ちて  
野べの琥珀を鳴らすかな  
刈り乾せ刈り乾せ稻の穂を

ともに來てまき來て植ゑし  
田の面に秋の風落ちて  
野べの琥珀を鳴らすかな  
刈り乾せ刈り乾せ稻の穂を

血潮は草に流さねど  
力うちふりくはをうち  
天のあらしにいかづちに  
わがたゝかひの跡やこゝ

見よ日は高き青空の  
端より端を弓として  
今し父の矢母の矢の  
光を降らすま晝なか

ともに來てまき來て植ゑし  
田の面に秋の風落ちて

思へ名もなき賤ながら  
遠きに石を荷なふ身は  
夏のゆふだち過ぐるごと  
ほまれ短き夢ならじ

いのちの長きたゝかひは  
こゝに音なし声もなし  
勝ちてかつらの冠は  
わづかに白きほゝかぶり

ともに來てまき來て植ゑし  
田の面に秋の風落ちて  
野べの琥珀を鳴らすかな  
刈り乾せ刈り乾せ稻の穂を

思ひより思ひをたどり  
思ひより思ひをたどり  
樹下より樹下をつたひ

ひとりして遅く歩めば  
月こよひ幽かに照らす

おぼつかかな春のかすみに  
うちけぶる夜の静けさ

ほの白き空の鏡は  
おもかげのこゝちこそすれ

物みなはさやかならねど  
鬼の住むやみにもあらず  
おのづから光は落ちて  
わが顔に触るぞうれしき

その光こゝに映りて  
日は見えず八重の雲路に  
その影はこゝに宿りて  
きみ見えず遠の山川

おのづから満ち来るしほは  
海原のうちにあふれぬ

さながらに遠き白帆は  
群れをなす牧場のひつじ  
吹き送る風に飼はれて

思ひやるおぼろおぼろの  
天の戸は雲かあらぬか  
草も木も眠れるなかに  
仰ぎ視てなみだを流す

舟 路

海にしてひびく鰻うなぎの  
水を撃つ音のよきかな  
大空に雲はたゞよひ  
潮分けて舟は行くなり

静かなる空に透かして  
青波の深さを見れば  
みなそこやはてもしられず  
流れ藻の浮きつ沈みつ

緑なす草のかげより  
わき出づる泉ならねど

わだつみの野へを行くらひ

雲行けば舟も随ひ  
舟行けば雲もまた追ふ  
空と水あひ合ふかなた  
もろともにけふの泊りへ

(藤村詩抄)

二 笛吹川をさかのぼる

田部重治

## 三 太郎冠者

(山路の旅)

野上 豊一郎

太郎冠者は、狂言の喜劇的性格の中でも最も代表的な者の一つで、名称の冠者は、本来元服加冠した少年の義で、木曾冠者・蒲の冠者のごとく、はじめはカンジャと読んで地位高き家の少年の尊称であったが、後には町冠者・辻冠者のごとく、カジャと音略して、少年の世故に疎く諸事に未熟なるをおとしめていうに用いられた。狂言の称呼は、更にそれからの轉化で、郎等・冠者ばらと「沙石集」にもあるように、同じくカジャと読んでも、特に主持ちの若者を意味するようになっていたのが、いつしか内容の變化を生じて、主持ちでさえあれば、必ずしも若者でなくとも冠者と呼ばれるようになった。即ち、ことばの本来の意義(年少者)が消失して、派生的意義(從僕)で使われるようになったのが、狂言の冠者である。言い換えれば、最初は一定の年齢についての称呼であったのが、最後には特定の社会的地位の称呼となったのである。

太郎冠者の太郎は、本来男性の総領の通俗的称呼で、昔は太郎の長男は小太郎と呼ばれ、小太郎に長男ができると又太郎と名づけられるような習慣があった。兄弟を年の順で呼べば、太郎・次郎・三郎と名づけるのが普通であるが、しかし太郎という名は、必ずしも年長者でなくとも、目だつ男というほどの意味にも一般的に用いられ、古くは君太郎(蘇我入鹿の通称)とか、くだつては相模太郎(北條時宗の通称)とかいうような名もあり、狂言の中にはそれらの性格的特徴に太郎を附けて、悪太郎・鈍太郎・弓矢太郎、あるいは岩太郎・河原太郎などと呼ばれる人物がある。また人間以外にも、例えば、利根川は関東一の大河という意味で坂東太郎の異名があり、また陰陽学の方では、天一天上の最初の日を特に天一太郎と呼んだり、耕作に関する四厄日の第一を梅雨太郎(八專二郎・土用三郎・寒四郎と合わせて四厄日)と呼んだり、あるいは幼児のかんの薬として用いられていた小動物に孫太郎

虫の名があるのは、幼児の一般名として孫太郎の称呼があったものか。再び人間にもどるが、愚鈍な人間のことを三太郎というのは、これも太郎の名の一般化された一例である。要するに、太郎というのは本来男性年長者に対する固有名詞であるが、更に轉化して人あるいは物の顯著なもの、代表的なものに対する一般名としても用いられる。

それに似たことは外國にもある。英語の例でいえば、最も通俗的な男性固有名詞のジョンは、男子の一般的称呼として、特に従僕の一般的称呼として用いられたりする。その用例として、ジョニー・アードリームズ（夢みる人・愚人）というのがある。またジョー・ブル（英人）とか、ジョー・チャイナマン（中國人）とかいったような典型的性格を意味する集團名もある。ジョンの愛称化されたジャックは、更に通俗的で、固有名詞から一轉化して男子の一般的称呼となり、また従僕の一般的称呼となるのはもちろんのこと、時としては水夫の一般名としても用いられる。そういった意味での複合詞としては、エヴリマン・ジャック（万人各自）、ジャック・イン・オフイス（役人ぶる男）、ジャック・オブ・オール・レイズ（なんでも屋）、ジャック・オブ・ブー・ボース・サイズ（内股膏藥の男）、ジャック・ナイフ（水夫用ナイフ）などがあり、ジャック・アップス（おすのろば）が愚人の一般名であるところは、われ／＼の三太郎を連想させる。また、ジャック・アップ・ドール（男の典型名）と女の典型名を組み合わせて、太郎とお花といったようなもので、それを應用したことわざに、エヴリー・ジャック・ハズ・ビーズ・ドール（どのジャックも自分のジルを持つ）というのがあるが、「われなべにとじぶた」といったような意味になる。ジャックは、これもやはり人間だけでなく、器具類や器械類の、特に人間の労力に代用される種類の物の名称にも用いられる。日本ではジャッキとなまっているジャック（起重機の種類）がその一

例である。

少しよけいなことをいったが、太郎は英語のジャックやジョンに似て、もと／＼個人的な固有名詞であったのが、一般名化される傾向があったので、従僕を意味する冠者と結合されて、太郎冠者という称呼ができた時は、それは特定の個人に対する称呼でもあったが、同時に従僕を意味する一般名でもあった。だから大名Aの従僕も太郎冠者であり、大名Bの従僕も太郎冠者であり、また、小名Cの従僕も太郎冠者であれば、小名Dの従僕も太郎冠者である。すべて主持ちの従僕はみな太郎冠者である。だから狂言においては、太郎冠者は必ず主持ちで、主人とともに登場する。主人は、従僕のがわから見れば、わが一身を委託した人であるから、常に頼うだ人と呼ばれる。太郎冠者の頼うだ人は、大名であるか小名であるかが原則で、大名は、江戸時代になっては、知行二万石以上の城主をそういったが、それ以前鎌倉・室町時代においては、將軍家の家臣で、相當に廣大な領地を持っていた守護・地頭の類をそう呼び、更にそれ以前の王朝時代末期には、地方に大きな名田（公田と區別して領主が自分の名を附けて呼んでいた土地）を所有したものが即ち大名で、狂言の大名はそういった名田所領者として理解される。また小名は、その所領の名田が大名に比べてはるかに小さいものであった。とにかく狂言の大名・小名の表面上の身分はそうなっている。取り扱われている主題は、もちろん、狂言創作当時（室町時代初期）の世態人情の諸諷刺（諷刺）なりに向けられていることはいうまでもないけれども。

太郎冠者の舞台的地位は、大名物と小名物によって違ふ。前者では頼うだ人がシテ（主役）で、太郎冠者はアド（副役）であるが、後者では反対にシテが太郎冠者で、頼うだ人がアドであるのがきま

りである。それは、前者では、より多く大名の愚鈍を犠牲にして、諷刺を試みようとする意向が現出し、後者では、主として太郎冠者の悪戯者の活躍を提示しようとする趣旨に裏づけられているからである。もともと、そうはいっても、前者においても、太郎冠者の活躍には相当に著しいものがあり、後者においても、頼うだ人の愚鈍よりは、大名のそれに劣らぬものがあるのはもちろんである。

大名にしても、小名にしても、あるいはそれに準ずる富裕者にしても、身分と裕福の程度に應じて、従僕をふたり以上抱えていることがある。その場合、太郎冠者は第一の従僕で、第二の従僕は次郎冠者と呼ばれ、たまに第三の従僕があれば、三郎冠者と呼ばれるが、狂言ではそれ以上の従僕は登場しない。そうして、その場合、太郎冠者の太郎は、次郎冠者の次郎（また、たまに三郎冠者の三郎）に對して年長者・先輩の意味を持つから、ことばの本來の内容を回復したわけである。

狂言には多くの太郎冠者が出る。つまり、大名物・小名物の曲目の数（現行曲としては大名物十七番・小名物四十六番）だけ太郎冠者が出るわけである。そのほかの種類のものにも、太郎冠者がシテまたは小アドとして出る曲が数番あるから、合計六十余人の太郎冠者をわれ／＼は持つことになる。これを横に並べるとおびただしい数ではあるけれども、（写真の二重写しのように）たてに重ね合わせて映して見ると、だいたいにおいて共通したところがあつて、ひとりの太郎冠者の影像ができあがる。モリエールの喜劇の中に、幾人も出て来る従僕のヌガナレル、あるいはシェークスピアの史劇と喜劇の中に、三度ほど出て来る騎士フォルスタフの場合などが、それに似ている。要するに、そういったひとりの太郎冠者の行狀を跡づけて見て、中世的庶民階級の一性格を整理することによって、あるいは多少なりとも、狂言作者の諧謔表現と社会批判の志向がうかがわれはしないかと思うのである。

大名が太郎冠者を呼び出す時の独白に、狂言の流儀によって「まずのさ者を呼び出だし、この儀を申し聞かせ喜ばしうと存ずる。」という言い方をする。のさ者はのさばる者の原意から、わがま／＼者、のら／＼者などの意味を持つことばらしく、本來礼にならざる野人であるから、粗野で、放縱で、あつかましく、人を人とも思わぬ横着ないけず／＼しさがある。それでいて、根はおくびよう者で、から威はりで、ほら吹きで、うそつきである。そういうと取りえがないようだが、多くの場合、主人ほど愚鈍ではなく、むしろ反対に、あたまではよくはたらき、才氣は十分にあり、物事にくつたがなく、人の思わくを見ることに機敏で、おこった相手を笑わせるなどは最も得たもので、いつも人を食ったようにへら／＼笑っている。だから、かれのいる所は常に明かるくてほがらかで、喜劇的空氣が充滿している。欠点は道義觀念が弱く、恆常心に乏しく、教養が低いことであるが、しかし、そんな小むずかしいことを喜劇的性格に求めるのは、求める方が無理である。教養は低いけれども、それを補うだけの才氣があるから、何事にも器用で、酒の席にもなれば、謠ったり舞ったりすることは最も得意とするところ、また、当時流行の秀句の理解などにも鋭いところを見せ、腰折の二つ二つは口をついて出ようというものである。

太郎冠者の奉公している大名は、型のごとく領地争いの問題で訴訟のため都に逗留しているが、一年二年とたつうちに、たいがいの所は見物してしまつたし、内にじっとしているのも退屈だから、きよ

うはどこぞ珍しい所へ行ってみたいと言ひ出した。

太郎冠者はもう都なれて、主人よりはよほど通人であつたので、それでは下京<sup>しもとうきやう</sup>辺<sup>へ</sup>によい庭を持った方があつて、ちやうど宮城野<sup>みやぎの</sup>のはぎが見ごろだから、お供をしましようということになつた。しかし、庭を見せてもらうと、きまつて、亭主が当座の歌を所望するから、その下心で行かねばなるまいと太郎冠者に注意され、そういつたことにかけては、全然素養のない大名のこと故、急に氣がひけて来て、「そのようなむずかしい所ならば行くまいですよ。」と言ひ出した。だが、せっかく思い立つてお出でなされぬと申すは残念なことだと言つて、外出ずきの太郎冠者は一案を思いつき、自分の持ち合わせの歌を一首主人に教えて、予行演習にかゝつた。その歌は、「七重八重九重とこそ思ひしに、十重咲き出づるはぎの花かな。」というのであつたが、それがどうしても大名には覚えられない。そこで、太郎冠者は物にたどえて覚えさせようとした。まず扇を出して、扇の骨は十本あるのがきまりだから、「七重八重」で骨を七本八本まで開き、「九重」で九本、「十重咲き出づる」でばらりとみな開くことにしようとして約束した。それならばなんとかなりそうだが、その先がまたむずかしいと言ふ。「はぎの花かな」が出るかどうかは氣づかわしいのである。しかし、太郎冠者の言うには、「つね／＼こなたの私をしからせらるるに、すねはぎの伸びての、かごうでの、と仰せらるるによつて、慮外ながら、むこうずねと鼻の先をお目にかけましよう。」と、これで主人も一安心して出かけることになつたのである。

さて向こうの家について、太郎冠者からお庭拜見を申し入れると、このごろは不掃除<sup>ふそうじ</sup>なによつて、一應は辞退されたが、頼うだ者を案内したと言ふと、それではと通された。「は、あ、これは打ち開いた景のよい庭じゃなあ。」と、大名はしやうぎを出させ、太郎冠者は亭主を大名に紹介する。亭主

は不掃除<sup>ふそうじ</sup>なと言つたが、すみからすみまでちり一つないと言つて大名は感心する。庭のたゞずまいはまず一面に備後砂<sup>びご</sup>を敷いて、島先にうめの古木を植え、北山から引かせた黒石を立て石とし、明かるい秋の日のさん／＼と照る下に、宮城野のはぎが白砂の上に赤々と咲きこぼれて美しい。大名はうめの古木の枝を茶うすのひき木にしたいの、立て石の中の白い部分を打ち欠いて火打ち石にしたいのなどといつて、太郎冠者に氣をもませたが、やがて亭主は太郎冠者を通して、「これへお腰を掛けらるるほどのお方へは、歌を一首ずつ所望申します。こなたにも何とぞ一首遊ばしてください。」と申し出た。

そこで、大名のブロンプター<sup>ブロンプター</sup>付き即興が始まるのであるが、その間、主役のからくりを見られないために、亭主にはあちらを向かしての詠吟であるけれども、せっかくの予行演習もあらかた忘れてしまつて、太郎冠者が扇を開いて骨を七本八本見せると、「七重八重」とは出ないで、「七本八本」といひ出すような始末で、上の句を完了するだけにもたいへんな手まどりであつた。亭主はそれをくり返して、「七重八重九重とこそ思ひしに十重咲き出づる」と吟じ、「あとを承りとうござる。」と催促すると、その時太郎冠者は主人のあまりの無能さにあいそをつかして、すねをたゞき鼻の先を指して姿を消してしまつたので、大名はとほうにくれ、それきりにしようとしたけれども、亭主がどうしても承知しないので、「太郎冠者がむこうずね。」と言ひ放つてしまつた。

(太郎冠者行狀記)

#### 四 記録映画の幻想性

津村 秀夫

最初に私の体験した一つの挿話を提示しよう。

私はある年の盛夏、帝劇で猛獣映画を観ていたのだが、題名はなんだったか忘れてしまった。製作者は、たしかあの有名な故マーティン・ジョンスンであったと思う。マーティン・ジョンスンの作品だから、猛獣映画といっても、決してお芝居の多い下等なものではない。主として、アフリカ地方における動物の棲息状態の、純粹な記録映画だったことだけはおぼえてゐる。

その映画の中で、たゞ一つ私に強烈な印象を與え、私を感動させた場面があった。それは、アフリカの茫々たる荒野を横切るしきりまの一群を、飛行機上から俯瞰撮影した壮大な場面である。私は自然というものの精神を、われ／＼人間に感受させる点において、映画藝術ほど偉大な技術はないとかねがね信じているが、（それはとうてい言語藝術即ち文学の及ぶ限りでない。）そのアフリカ平原の俯瞰撮影は、實際私を圧倒し茫然とさせた。しきりまの一群は、まるで大河の流れだった。そうして、その異様で怪奇とさえ私の感覚に訴えた動物の流れは、私に原始的世界というものを、瞬間のうちに想像させたのに違いない。ところが、その時の私の興奮を、その後になって靜かに分析してみると、原因はもう一つあったのである。というのは、それらの荒野の画面の遠く奥の方には山脈を私は認めた。もともと、それは空中撮影なればこそ、カメラの遠視がきいたのであるが、とにかく、はてしなき廣野のはてにつらなる山脈のかすかな影は、不思議にも私にある無常感というか、諦観（たじかん）というか、——ある寂莫（さびしげ）を與えたのである。思うに、こういう人間の感動というものは、説明の困難なものだ。私は回想する。かつて私はある夏に、軽井沢のある山頂から、妙義山その他の信州の諸峰を一望のもとに收めて、ある種の感動に打たれたものだが、アフリカの廣野の感動は、あえていえば、そういう感動を更に深め、更に拡大したものだといふべきであらうか。しかしどうも、そのフィルムの與えた

感動の方には、全く別な——きわめて私にとって新鮮な要素が加わっていたようである。奇怪にひびくかも知れないが、実は私はそのフィルムの断片から、地球というものを感覚的に感じたのである。これは、確かに空中撮影のもたらすカメラの感覚と、一望千里の廣野という偉大な対象とが、結びついて生まれたものであることに根本の原因があったに違いなかったが、（もし地上撮影であつたら、私の感動は月並みなものであつたかも知れない。）——私は地球というものを、かね／＼観念的には納得したつもりでいるくせに、突然私を襲ったその感動は、實際そういう観念を超越したものであつたのである。考えてみると、地球というものは実に怪物のごときものである。私はよく信州の高原で、夏の澄みきった星空をながめることを享樂したが、（どうも星空というものもよく考えてみると奇怪なものである。）われ／＼の文学的教養の傳統に影響されてか、われ／＼はそういう場合にも、たいてい詩的な氣分に誘われ、詩的に星空をながめてしまいがちである。ところが、そのアフリカ廣野のフィルム断片だけは、私の生涯にかつてなかった不思議な体験を與えた。その体験はどうも説明困難なのだが、あえていえば、實際「地球を感じた」とでもいうほかはないものである。そうして、その感動を情緒的に説明すれば、ひどく虚無的な寂莫感に近いものだったのである。

さて、私はここで、何もそういう感動についての語りたかったのではない。今も私はあざやかにおぼえているが——私はその夜、ひとり夜ふけの丸の内の舗道を歩きながら、私の体験が、いかに特殊のものであつたかという点について反省をしたのである。という意味は、大部分の観客は、案外、あの場面でしきりまの一群のみに見とれ、月並みな感嘆をもらしていたのではないか、という疑問にひつか、ったからである。

私はその時、映画批評というものについて考えた。私が、私の感動をそのまま披瀝するということ  
は、なるほどそれで十分映画批評になり得るであらう。そういう風変わりな映画批評もあってよい。  
いな、むしろなければならぬまい。だが、果たして一般の観客には、その意味が通ずるであらうかとも  
考えたのである。というのは、かれらはおそらく、画面のスリリングな点のみに興奮したに違いない。  
また、もしかりに、通俗ならざる知識人の数十人の観客が、たとえその中に混じていたとしても、私  
と同じような感動を受けた人が、果たしてどれだけあったであらう、ということについても想像を  
めぐらした。小説やドラマにおいても、鑑賞者の個性と、その生活体験や教養のさまざまの相違と、か  
けて加えて藝術的感受力の高低によつて、さまざまの受け取り方がなされるのは当然のことである。  
ポールのヴァレリーのことはもつてすれば、さまざまの鑑賞者のうちに  
おいて當まれるわけである。

しかしながら、映画——特に記録映画においては、この鑑賞者の受け取り方の相違と多彩というも  
のは、まことに変通自在なものではないかということが考えられる。この問題を解くかぎの一つは、  
映画——特に記録映画というものが、鑑賞者のおの／＼のうちに呼び起す、さまざまの空想であり、  
幻影である。

思うに、映画藝術の魔術のからくりの一つは、案外、映画の持つ機械性の中にひそんでいるのでは  
あるまいか。例えば上述の作品の場合、被写体はしまうまの一群であつたとしても、カメラは必然  
的に焦点外の背景（即ち廣野のはての山脈）までも写し取つてしまう。直接カメラがシュートした被  
写体以外のものまでも、有無をいわさず写し取らねばならぬということは、よく考えてみれば、映画

のおもしろい運命である。これは劇映画の場合においても同じことであつて、例えばAとBが会話をし  
てゐるとする。映画の進行上当面の焦点は、その会話内容にあるとしても、カメラはかれらふたりの  
人間の「背景」を正確に写し取つてしまうから、監督者は、決して、この背景というものを無視する  
ことはできないのである。小説家は、例えば登場人物の重要な会話を取り扱う時、しばしばこの背景  
というものをや、雰囲気というものを省略することができであらう。むしろ簡潔に省略することに  
つてこそ、小説藝術は、製作技巧上のコンセンションができるのである。ところが、映画とい  
うものは、やっかいなことに、いかなる場合にも背景は省略できないという運命を背負つてゐる。（背  
景ということばが誤解を招くおそれがあるとすれば、かりに現実的雰囲気と換言してもよい。）

優れたる映画藝術家は、それ故に、この背景というものの選定と、背景と人物との藝術的連関に、  
深甚のくふうを凝らして雰囲気（きふき）の統一に努めるのであるが、しかも、映画のリアリティを決定する上  
に重要なものであるこの背景によつてこそ、鑑賞者の空想や幻影は、さまざまの変化が與えられると  
いう点が、最も注目に値する。そうしてこの背景というものは、現実的雰囲気というものが、人工的な  
ものでなく、ロケーションによる真実の自然界であればあるほど、人間に與える映画的ヴァイジョンも  
より多彩になるであらう。セットによる人工的背景というものは、いかに複雑なものであつても、監  
督とカメラマンの協力によつて、ある程度に情緒が規定され、したがつて、ある種の説明がなされ  
てしまうものであるが、真実の自然界を、カメラによつて切り取つた場合は、自然は決して説明し  
ない。自然の複雑さははるかに偉大であり、しかもその複雑さと深まりに比例して、個々の鑑賞者に  
與えるヴァイジョンも、またさまざまの変化を生産するであらう。

（映画と批評）

## 五 東海道五十三次

岡本かの子

風俗史専攻の主人が、ことに昔の旅行の風俗や習慣に興味を向けて、東海道に探査の足を踏み出したのは、まだ大正もはじめの一高の生徒時代だったという。私はその時分のことは知らないが、大学生時代の主人が、しばしばそこへ行くことは確かに見ていたし、一度などは、私もいっしょに連れて行ってもらった。念のため、主人と私の関係を話しておく、私の父は、幼時に維新の匆騷を越えて来たアマチュアの有職故実家であつたが、斯道に熱心で、研究の手助けのため、ひとり娘の私に絵画を習わせた。私は十六、七のころには、もう、濃くどうさをひいた薄美濃紙をあてがって、絵巻物の断片をすき写しすることもできたし、残存のかぶとのしころを、比較をまちがえず写生することもできた。だが、自分の独創で、何か一枚絵をかいてみようとなると、それはできなかった。

主人は、父の邸へ出入りする唯一の青年といつてよかつた。ほかに父が交際している人もないことはなかつたが、みな中年以上か老人であつた。そのころは、「成功」などということばが特に取り出されて流行し、娘たちはハイカラまげという洋髪を結っている時代で、虫食いの圖書遺品をあさるというのは、よく／＼向きの変わった青年に違ひなかつた。けれども父は、

「近ごろ珍しい感心な青年だ。」とほめた。

主人は地方の零落した旧家の三男で、学途にはついたものの、学費の半ば以上は自分で都合しなければならなかつた。主人は、好きな道を役立てて、歌舞役の小道具方の相談相手になり、デパートの

飾り人形の衣裳を考証してやつたり、それらから得る多少の報酬で学費を補っていた。かなり生活は苦しうだつたが、服装はきちんとしていた。

「せっかくの学問の才を切ればしにして使い散らさないように——」

と始終忠告していた父が、その実意からしても、死ぬ少し前、主人を養子に引き取って、長年苦心の蒐集品と助手の私を、主人に譲つたのは道理である。私が主人に連れられて、東海道をはじめて見たのは、結婚の相談がまとまつてまもないころである。

今まで友だちづきあいをしてきた青年を、急に夫としてながめることは、少し窮屈でこそばゆい氣もしたが、私には前から幾分そういう予感がないわけでもなかつた。狭い職分や交際範囲の中に、同じような空氣を呼吸して来た若い男女が、どのみち一組になりそうなのは、池の中の魚のように本能的に感じられるものである。私は、てれるようなこともなく、ことばもそう改めず、この旅でも、たゞ身のまわりの世話を、少し遠慮をのけてしてあげるぐらいなものであつた。

私たちは静岡駅で夜行汽車をおりた。すぐ駅の車を雇つて町なかを引かれて行くと、夜の明けるのもやの中から、大きなわさびづけの看板やたいでんぶの看板が、のそつとひたいの上に現われて来る。旅慣れない私は、心のはずむ思ひがあつた。

まだ戸がしまっている二軒のあべかわもち屋の前を通ると、すぐ川瀬の音にさざりを立てて安倍川が流れている。わだちに踏まれて躍る橋板の上を引かれて行くと、夜行で寝不足のまぶたが、涼しくぬぐわれる氣持がする。

町ともつかず村ともつかないひなびた家並みがある。こゝは重衡の東下りの時、鎌倉で重衡に愛さ

れた遊女千手の前の生まれた手越の里だという。重衡、きられて後、千手は尼となって善光寺に入り、歿した時は二十四歳。こういう由緒を、簡単に主人は前の車から話し送ってくれる。そういえば、向き合った山門の双方に名灸所と札をかけている寺など、なんとなく古雅なものに見えた。私は、氣をきかして距離を縮めてゆる／＼走ってくれる車の上から言つた。

「じゃ、千手もまだ、重衡の薄幸な運命に同情できる、みず／＼しい情緒のある年ごろだったというわけね。」

私はもう一度、なんとなく手越の里をふり返つた。

私と主人は、こういう情愛に関係する話は、お互の間はもちろん、現代の出来事を話題としても、決して話したことはない。そういうことに触れるのは、私たちのような、好古家の古典的な家庭の空氣を吸って來たものにとって、なま／＼しくて、ある程度のいやみにさえ感じた。たゞ歴史の事がらを通しては、こういうふうには、たまには語り合うことはあつた。それがふたりの間にいくらか温かい親しみを感ぜさせた。

いかにも街道という感じのする古木のまつ並木が続く。それが盡きると、ぱつと明かくなつて、丸い丘が幾つもある間の、開けた田畑の中の道を、車は速力を出した。小さい流れに板橋がかゝつてゐた。その橋のたもと右側にある茶店ふうのわら家の前で車はかじ棒をおろした。

「はい、丸子へ参りました。」

なるほど障子に「名物とろ／＼じる」と書いてある。

「腹がへつたでしょう。ちょっと待ってらっしゃい。」

そう言つて、主人は障子をあけて中へはいった。

それはたぶん、四月も末か、五月にはいったとしたら、まだいくらもたない時分と記憶する。

静岡辺は暖かいからというので、私は薄着の綿入れで写生帳とコートは手に持っていた。そこらあたりにやしおの花があざやかに咲き、まるみのある丘には、一面、茶の木がうぐいすもちを並べたようにもえぎの新芽でよそおわれ、大氣の中にまでほ／＼としたおいを漂わしていた。

私たちは、奥座敷といつてならづけ色の疊にがた／＼障子のはまつているへやで、長い間とろ／＼じることができるのを待たされた。少し細めにあげた障子のすきまから、烟を越して平凡な裏山がのぞかれる。老鶯が鳴く。丸子の宿の名物とろ／＼じるの店といつても、もうそれをたべる人は少ないので、店のはたゞの腰掛け飯屋になつてゐるらしく、耕地測量の一行らしい器械を携えた三、四名と、おもてに馬をつないだ馬子とが、消し残しの朝の電燈の下で、高笑いをまじえながら食事をしてゐる。

主人は私に退屈させまいとして、懷から東海道分間絵図を出して、ページをめくつて説明してくれたりした。地図と鳥瞰図とのあいの子のようなもので、平面的に書きこんである里程や距離を胸に入れたながら、自分の立つ位置から右に左に見える見当のまゝ、山や神社佛閣や城が、およそその見える形に側面の略図をかいてある。もちろん、改良美濃紙の複刻本であつたが、原図の菱川師宣の、あの暢艶で素雅な趣はちりちり味わえた。しかし、自然の実感というものは全くなかった。

「昔の人間は、必要から直接に発明したから、こんな便利でももしろいものができたんですね。つまり観念的な理屈に義理だてしなかつたから——今でもこういうものを作つたら便利だと思ふんだが。」はじめ、かなり私への心づかいで話しかけているつもりでも、いつのまにか、自分ひとりだけで古

典思慕に入りこんだひとりごとになっている。好古家の学者にありがちなこの癖を、始終私は父に見ているので、あまり怪しまなかったけれども、ふたりではじめての旅で、ここにこういう場所で待たされつゝある時の相手の態度としては、さびしいものがあつた。私は氣を紛らすために障子を少しあげひろげた。

午前の日はさすがにまぶしく美しかった。老婢が、「とろくじるができました。」と運んで來た。別に変わった作り方でもなかったが、たきたての麦飯の香ばしい湯げに、神仙の土のようなにおいするじねたじよは、落ちついたおもしろさがあつた。私は香りを消さぬように、薬味の青のりをふらずにわんを重ねた。

主人は給仕をする老婢に、「皆川老人は。」「ふじのや連は。」「齒みがき屋は。」「彦七は。」と妙なことをきき出した。老婢はそれに対して、消息を知っているものもあるし、知らないものもあつた。話の様子では、この街道を通りつけの諸職業の旅人であるらしかった。主人が、「作樂井さんは。」ときくと、「あら、いま、さががた、この前を通つて行かれました。あなたも峠へかゝられるなら、どこかでお会いになりましょう。」

と答えた。主人は、

「峠へかゝるにはかゝるが、まわり道をするから——なに、それに別に会いたいというわけでもないし。」

と話をうち切った。

私たちが店を出る時に、主人は私に、「この東海道には、東海道人種とも名づくべきおもしろい人

間がたくさんいるんですよ。」と説明を補足した。

細道の左右に、叢々たる竹やぶが多くなつて、やがて、二つの小峰がま近くそびえ出した。天柱山に吐月峰というのだと主人が説明した。私の父は潔癖家で、毎朝、自分の使うたばこ盆の灰吹を私にそうじさせるのに、灰吹の筒の口に、きじの目が新しくはだを現わすまで、と石の裏に何度も水を流してはこすらせた。朝の早い父親は、私が眠い目をがまんして、と石でこすって持つて行く灰吹を、座敷にまわり、きせるをひざに構えたまゝ、黙って待っている。私は氣が氣でなく急いで持つて行くと、父はまゆをしかめて私にもどす。私はまたこすりなます。その時、逆にした灰吹の口に近く指に当たる所に、磨滅した烙印で吐月峰とおしてあるのがいつも目についた。春の日ざしがうらゝかに拡がった空のような色をした竹の皮層に、のんきにすわっているこの意味のわからない書体を、ふきげんな私は憎らしく思った。

灰吹の口がきれいにこすれて父の氣に入つた時は、父はありがとうと言って、それをたばこ盆にさしこみ、きせるをくゆらしながら言った。

「おかげでおいしい朝のたばこが、一ぶく吸える。」

父はそこで私に珍しくほおえみかけるのであつた。

母の歿したのちは、男の手一つで女中やばあやや書生を使い、私を育てて來た父には、生きがいとして考証詮案の楽しみ以外にはないように見えたが、やはりさびしいらしかった。だが、情愛の発露の道を知らない昔人は、どうにもしかたなかったらしい。掃き淨めた朝の座敷で幽寂閑雅な氣分にひ

たる。それが唯一の自分の心を開く道で、この機会においてのみ、娘に対しても、すなおな愛情を示す微笑をもらすことができたのである。私は物どころついでから、父をあわれなものに思い出して来て、できるだけ灰吹をきれいにそうじしてあげることに努めた。そして、灰吹に烙印してある吐月峰という文字にも、何かそういったあわれな人間の思抜きをする意味のものが、含まれているのではないかと思うようになった。

父は私と主人との結婚話がきまると、その日から灰吹そうじを書生に代わってやらせた。私は物足りなく感じて、「してあげますわ。」と言っても、「まあいい。」と言っただうしてもやらせなかった。参考の写生や縮写もやらせなくなった。おそらく、娘はもう養子のもものと譲った氣持からであろう。私は昔ふうな父のあまりにりちぎな意地強さに、ちよつと暗涙を催したのであった。

まわりの丸みがかつた平凡な地形に対して、天柱山と吐月峰は突兀として秀でてゐる。けれども瀧とか峻とかいうそばだちようではなく、どこまでも肩の柔らかな線である。この不自然さが、二峰を人工の庭の山のように見せ、その下の所にあるわらぶきの草堂もろとも、一幅の絵になつてだんだん近づいて来る。

柴の門をはいると、瀟洒とした庭があつて、寺と茶室と折衷したような家の入口にさびた聯がかゝっている。聯の句は、

幾若葉はやしはじめの園の竹

山櫻思ふ色添ふかすみかな

主人は案内を知っていると見え、しおり戸をあけて中庭へ私を導き、そこから声をかけながら庵の中にはいった。一室には、灰吹を作りつゝある道具や竹材が散らばっているだけで、人はいなかった。

主人はかまわずに中へ通り、たなに並べてある宝物に向かつて、私にこれを写生しときたまえと命じた。それは一休の持ったという鉄鉢と、頓阿彌の作つたという人丸の木像であつた。

私が、矢立の筆を動かしていると、主人はそこに轉がっていた、でき損じの新しい灰吹を持って来て、巻きたばこをくゆらしながらぼつ／＼話をする。

この庵の創始者の宗長は、連歌は宗祇の弟子で禪は一休に学んだというが、連歌師としてのの方が有名である。もと、これから三つ上の宿の島田の生まれなので、晩年、齋藤加賀守の庇護を受け、京から東に移った。そしてこゝに住みついた。庭は銀閣寺のものを小規模ながら写してあると言つた。

「室町も末になつて、乱世の間に、連歌なんという閑文字がもてあそばれたということもおもしろいことですが、これが東國の武士の間にはやったのは妙ですよ。都から連歌師がくだつて来ると、もよりよりの城から招いて、連歌一座所望したいとか、発句一句ぜひとか、しかもそれが、あす合戦に出かける前日に城内から所望された、などと書いた連歌師の旅行記がありますよ。日本人は風雅に對して、何か特別の魂を持てるんじゃないかな。」

連歌師の中には、また職掌を利用して、京都方面から関東へのスバイや連絡係を勤めたものもあつたというから、幾分その方の用事もあつたには違いないが、太田道灌はじめ東國の城主たちは、熱心な風雅擁護者で、したがって東海道の風物は、かなり連歌師の文章で当時の狀況が残されていると主人は語つた。

私はそれよりも、宗長という連歌師が、東國の廣漠たる自然の中にくだつても、なお魔残の京都の文化を忘れかね、やっとこの上方の自然に似た二つの小峰を見つけ出して、そのかげに小さなかつむりのような生活を営んだことを考えてみた。少女の未練のようなものを感していじらしかった。で、立ち去りざわにもう一度、銀閣寺うつしという庭から、天柱、吐月の二峰をよくながめあげようと思った。

主人は、新しい灰吹の中へなにがしかの志の金を入れて、工作べやの入口の敷居に置き、

「万事灰吹でまに合わせて行く。これが禪とか風雅というものかな。」

と言つて笑つた。

「さあ、これからが宇津の谷峠。業平の、『駿河なるうつしの山べのうつしにも夢にも人にあはぬなりけり。』あの昔の宇都の山ですね。登りは少し骨が折れましよう。持ちものはこちへお出しなさい。持つてあげますから。」

鉄道のトンネルが通つていて、おりから、通りかゝつた汽車に、一度現代の煙を吐きかけられた以後は、全く時代とは絶縁された峠の旧道である。左右から木立の茂った山のがけすその間をくねつて通つて行く道は、時々こすえの葉の密閉を受け、行手が小暗くなる。そういう所へ来ると、空気がひやりとして、右側に走つてゐる瀬川の音が、急に音を高めて来る。なんとも知れない鳥の声が、瀬戸物の破片をこすり合わせるような鋭い叫び声を立てている。

私は芝居で見る默阿彌作の、「葛紅葉宇都谷峠」のあの文彌殺しの場面を思い起して、婚約中の男女の初旅にしては、主人はあまりに甘くない舞台を選んだものと、私は少しおびえながら主人のあと

について行つた。

主人は時々立ちどまつて、「これ、どきなさい。」とこうもりがさではねている。大きなすがすが横腹の辺に朽ち葉をはりつけて目の先にうずくまつてゐる。私はおびえの中にも、主人がこの旧峠道にかかつてからは、別人のように快活になつて、顔もいき／＼して來たのに氣づかないわけには行かなかつた。こうもりがさを振り腕を払けて、手に触れるくまさをむしつて行く。それは少年のような身軽さでもあり、自分の持ち地にはいった園主のような氣まゝさでもある。そして時々私に、「いいでしょう、東海道は。」

と同感をしていた。私は、

「まあね。」と答えるよりしかたがなかつた。

ふと、私は古典にひたる人間には、どこかその中から、ロマンティックなものを求める本能があるのではあるまいかなど考えた。あんまり突如としてはいった別天地に、私はくたびれるのも忘れて、たいていせと主人について歩いて行くのであつた。そのうち、どのくらいだったか、こゝが峠だといふ、展望のある平地へ出た。家が二、三軒ある。

「十圓子も小粒になりぬ秋の風。」と許六の句にあるその十圓子を、もとこの辺で賣つたのだが。」

主人はそう言いながら、一軒の、駄菓子ものを並べて、わらしなどつてある店先へ私を休ませた。私たちが、おかみさんの運んで來た濃茶を飲んでみると、古障子をあけて、吳縞の羽織を着た中老の男が出て來て声をかけた。

「さよう、珍しい所で会つた。」

「や、作樂井さんか、まだこの辺にいたのかね。もつとも、さつき丸子では峠にかゝっているとは聞いたが。」

と主人は答える。

「坂の途中で、江尻へ忘れて来た仕事のこと思い出してさ。帰らなきゃなるまい。いま、奥で二ぱし飲みながら考えていたところさ。」

中老の男はじろく私を見るので、主人は正直に私の身もとを紹介した。中老の男は私にはいていねえに、

「自分も絵の端くれをかきますが、いや、そのほか、何やかや八百屋でして。」

男はちよつと軒ばかり空を見あげたが、

「どうだ、日もまだちようどぐらいいだ。奥でぼくと一ぱいやってかんかね。晝飯も食うてたらどうです。」

と案内顔に奥へはいりかけた。主人は青年ながら、うちで父と晩酌をする口なので、私の顔をちよつと見た。私は作樂井というこの男の、人なつかしそうな目もとを見ると、反対するのが悪いような気がしたので、

「私はいけませんわ。」と言った。

あら壁の田舎家の奥座敷で、主人と中老の男のさかずきの献酬が始まる。裏の障子をあけた外は、重なつた峰の岬が見開きになって、その間から遠州の平野が見晴らせるのだろうか、濃いかすみやどんでかゝり、金色にやゝすけているのは、なの花畑らしい。のどきに来る子供をしかりながらおか

みさんがあつせんする。私はどこまで旧時代の底に沈ませられて行くか多少不安になると同時に、これより落ち着きようもない静かな気分が魅せられて、わきでゆで卵などひいていた。

「この間、島田で、大井川の川越しに使った連台を持つてる家を見つけた。あんたに会ったら教えてあげようと思って——」

それから、酒店のしるしとして古風にすぎの玉を軒につけている家が、まだ一軒石部の宿に残っていることやら、お伊勢参りの風俗や道中うたなら、関の宿の古老に頼めば知っていて教えてくれることだの、主人の研究の資料になりそうなることを助言していたが、私の退屈にも氣を配ったと見え、

「奥さん、この東海道という所は、一度や二度来てみるのは珍しくて目保養にもなっていますが、うっかりはまりこんだら抜けられませんか。氣をつけなさいまし。」

はまりこんだら最後、まるであめにかゝったありのようになるのであると言った。

「そう言っちゃ悪いが、御主人などくだいぶ足をねばり取られてる方だ。」

酒は好きだがそう強くない性質らしく、男は赤い顔になんとか感情を流露させる声になった。

「この東海道というものは、山や川や海がうまく配置され、それに宿々がいくあいな距離にあつて、景色からいっても、旅のおもしろみからいっても、めったにない道筋だと思ふのですが、しかしそれより、自分は五十三次ができた慶長ごろから、つまり二百七十年ばかりの間に、幾百万人の通つた人間が、旅というものでなめるさびしみや、いくらかの氣散じや、そういったものが、街道の土にもまつ並木にも宿々の家にもしみこんでいるものがある。その味が、自分たちのような、情味にもろい性質の人間をしびれさせるのだらうと思ひますよ。」

しいて同感を求めるような語氣でもないから、私はなんとも返事のしようがない氣持を、たゞ微笑に現わしてうなずいてだけいた。すると作樂井はひとり感に入つたように首を振って、

「御主人は、よく知つてらっしゃるが、考えてみれば自分などは――」

と言つて、身の上話を始めるのであった。

家は小田原に在る穀物商で、妻もめとり、三、四人の子供もできたのだが、三十四の年に、ふと商用で東海道へ足を踏み出したのが病みつきであつた。それから、家に腰が落ちつかなくなつた。この宿を朝だちして、晩はあの宿に着こう。その間の孤独で動いて行く氣持、前にたつた宿には、生涯二度ともどる時はなく、行き着く先の宿は、自分の目的の唯一のものに思われる。およそ旅というものには、こうした氣持は附きものだが、この東海道ほどその感を深くさせる道筋はないと言ふのである。それは何度通つても、新しい風物と新しい感慨にいつも自分をひたすのであつた。こゝから東の方だけ言つても、

程が谷と戸塚の間の焼餅坂に權太坂

箱根旧街道

鈴川、まつ並木の左富士

この宇津の谷

こういう場所ほことにしみ／＼させる。西の方にはなお多いと言つた。

それに不思議なことは、この東海道には、京へのぼるという目的意識が今もって旅人にはたつき、泊り重ねて大津へ着くまでは、緊張していて常にうれしものである。だが、大津へ着いた時には力

が落ちる。自分たちのような用事もないものが、京都へのぼつたとてなんにならう。

そこで、また、汽車で品川へもどり、そこから道中すごろくのように一足一足、あがりに向かつて足を踏み出すのである。なんのために。目的を持つために。これを近ごろのことばでは、なんというのでしょうか。憧憬、なるほど、その憧憬を作るために。

自分が再々家をあけるので、妻はあいそをつかしたのも無理はない。妻は子供を連れたまゝ、実家へ引き取つた。実家は熱田附近だが、そう困る家でもないで、心配はしないようなものの、さすがに時々、子供に学費ぐらひは送つてやらなければならぬ。

作樂井は器用な男だつたので、表具や、ちよつとした建具左官の仕事はできる。自分でふすまを張りかえて、それに書や絵もかく。こんなことを生業として、宿々に知り合いができると、なあ、この街道からぬけられなくなり、家を離散させてから二十年近くも、東海道を住み家としてのぼりくだりしていると言つた。

「こういう人間は私ひとりじゃありませんよ。おなかまがだいぶありますね。」

やがて、

「これから大井川あたりまでごいっしょに連れだつて、奥さんを案内してあげたいんだが、何しろ忘れて來た用事というのが壁の仕事でね、乾きぐあいもあるので、これから帰りましょう。まあ、御主人がついてらっしゃれば、たいがいの様子は御存じですから。」

私たちは簡単な食事をしたのち、作樂井と西と東に別れた。暗いトンネルがどこかにあつたように思ふ。

私たちはそれから峠をくだった。軒の幅の広いせいの低い家が並んでいる岡部の宿へ出た。茶どきと見え、青い茶が干してあったり、茶師の赤銅色の裸体がくすんだ色の町に目だっていた。私たちは藤枝の宿で、熊谷蓮生坊が念佛を抵当に入れたという、その相手の長者の邸跡が今は水田になっていて、早苗がやさしく風に吹かれてるのを見に寄ったり、島田では、作樂井の教えてくれた川越しの連台を藏している家を尋ねて、それを写生したりして、大井川の堤に出た。見晴らす廣漠とした河原に、石と砂との無限の展望。初夏の明かい日ざしも消し盡くせぬ人間の憂愁の数々に思われる。堤が一髪を横たえたように見える。こゝで名代なのは朝顔目あきのまつで、二本になっている。私たちはその夜、島田から汽車で東京へ帰った。

結婚後も、主人はたび／＼東海道へ出向いたうちに、私も二度ほど連れて行ってもらった。

もうその時は、私もなりふりはかまわず、たゞくすんでひやりとつめたあゝの街道の空氣にひたりたい心が急いだ。私も街道に取りつかれたのであろうか。そんなにさびれていながら、あの街道には、かげににぎやかなものが潜んでいるようにも感じられた。

一度は藤川から出発し、岡崎で藤吉郎の矢矧の橋を見物し、池鯉鮒の町はずれにある八つ橋の古址をたずねようというのであった。だいこんの花もさやになってる時分であった。

そこはやゝ湿地がかつた平野で、たんぼと多少の高低のある沢地がだるく入りまじっていた。畦川が流れていて、濁った水にひとひらの板橋がかつていた。悲しいくらい周囲は目をさえぎるものもない。土地より高く川が流れているらしく、やゝ高い堤の上に、点を打ったように枝葉を刈りこまれ

たまつ並木が見えるだけであつた。「こゝを写生しときたまえ。」と主人が言うので、私は矢立を取り出したが、標本的の絵ばかりかいてる私には、この自然もまき絵の模様のようにしか写せないの、途中でやめてしまった。

三河と尾張の國境だという境橋を渡って、道はだん／＼丘陵の間に入り、この辺が桶狭間の古戰場だというたんぼ道を通った。戦場にしては案外狭く感じた。

鳴海はもう名物のしほりを賣っている店は一、二軒しかない。並んでいる邸宅ふうの家々は、昔鳴海しほりを賣つてもうけた家だと車夫が言つた。池鯉鮒よりで氣のついたことには、家の造りが破風を前にして、東京育ちの私には、横を前にして建ててあるように見えた。主人は、

「この辺から伊勢造りになるんです。」

と言つた。その日私たちは熱田から東京に帰った。

こがらしの身は竹斎に似たるかな

十一月も末だったので、主人は東京を出がけに、こんな句を口ずさんだ。それはなんですと私がきくと、

「東海道遍歴体小説の古いもの一つに、竹斎物語というのがあるんだよ。竹斎というのは、小説の主人公のやぶ医者の名さ。それを芭蕉が使つて吟じたのだな。たしか芭蕉だと思つた。」

「では、私たちは男竹斎に女竹斎ですか。」

「まあ、そんなところだろう。」

私たちの結婚も、昂揚時代というものを見ないで、平々淡淡の夫妻生活にはいつていた。父はこの時もう死んでいた。

その時の目的は、鈴鹿を越してみようということであった。亀山まで汽車で来て、それから例の通り、車に乗った。枯れ桑の中に石がきのはだをそびえ立たせている亀山の城。関のさびれた町にはいつて、主人は作樂井が昨年話してくれた古老を尋ね、話を聞きながら、こゝに持ち合わせている伊勢参りの浅黄のきやはんや、道中差しなど私に写生させた。福藏寺に小まんの墓。

関の小まんが米かす音は一里聞えて二里ひびく

あだうちの志があつた美女の小まんは、また大力でもあつたので、こういうたが残っていると云った。

関の地藏尊にもうで、私たちは峠にかゝった。

満目肅殺の氣に充ちて、旅のうらさびしさが骨身にとおる。

「あれが野猿の声だ。」

主人はにこ／＼して私に耳を傾けさせた。私はまたしても、こういう所へ來るといき／＼して來る主人を見てうらやましくなった。

「ありたけの魂をすっかり投げ出して、どうでもしてくださいと言いたくなるようなさびしさですね。」

「この底に、ある力強いものがあるんだが、まあ、きみは女だからね。」

小うたに残っている間の土山へひょっこり出る。屋根附きの中風藥の金看板など見える小さな町だ

が、今までの寒山枯木に対して、血の通う人間に会う歓びは覚える。

風が鳴っている三上山のふもとを車行して、水無口から石部の宿を通る。なるほどこの酒店で、作樂井が言つたように、すぎの葉を玉に丸めて、その下に旗をさげた看板を軒先に出している家がある。主人は仰いで、「はあ、これが酒店のしるしだな。」と言つた。

琵琶湖の水が高い川になつて流れる下を、トンネルに掘つて通っている道を過ぎて、私たちは草津のうばがもち屋にかけこんだ。ガラス戸の中は、茶がすをかけたかすどの火で暖かく、窓の色ガラスの光線をうけて、はちの金魚はうろこを七彩にひらめかしながら泳いでいる。外をのぞいてみると、比良も比叡も遠く雪雲をかぶっている。

「この次は天津、次は京都で、作樂井に言わせると、もう東海道でもあがりの憧憬の力が弱まっている宿々だ。」

主人はもちをたべながら笑つて言つた。私は、

「作樂井さんは、このごろでもどこかを歩いてらっしゃるでしょうか、こういう寒空にも。」  
と言つて、漂浪者の身の上を思つてみた。

それから二十年余りたつ。私は主人といつしよに名古屋へ行った。主人はそこにできた博物館の頼まれ仕事で。私はまた、その学校へ赴任している、主人の弟子の若い教師の新家庭を見舞うために。

その後の私たちの経過を述べると、きわめて平凡なものであつた。主人は大学を出ると、美術工藝学校や、その他二、三の勤め先ができた上、類の少ない学問筋なので、何やかや世間から相談をかけ

られることも多く、いそがしいまゝ、東海道の行きはまもなく中絶してしまつた。たゞ時々、小夜の中  
山を越して日坂のわらびもちを食つてみたいとか、御油、赤阪の間のまつ並木の街道を歩いてみたい  
とか、うわごとのように言つていたが、その度もだん／＼少なくなつて、最近では、東海道のいくら  
か縁のあるのは、何か手のこんだ調べものがあると、蒲郡の旅館へ一週間か十日行つて、その間、必  
要品を整えるため急いで豊橋へ出てみるぐらいなものである。

私はまた、子供たちもできてしまつてからは、それどころの話でなく、標本の写生も、別に女子美  
術出の人を雇つてもらつて、私はすっかり主婦の役に髪をふり乱してしまつた。たゞ私が今も残念に思  
つてゐることは、絵は写すことはかりして、自分の思つたことがかけなかつたことである。子供の中の  
ひとりで、音楽好きの男の子があるのをさいわいに、これを作曲家に仕立てて、優秀は別としても、と  
にかく、自分の胸から出るものを使うまゝ表現できる人間をひとり作りたいと骨折つてゐるのである。  
さてそんなことで、主人も私も東海道のことはすっかり忘れはて、ふたりともめい／＼の用向きに  
ぼつ／＼として、名古屋での仕事もぼつ／＼片づいた晩に、私たちはホテルのへやで番茶を取り寄せながら  
雑談してゐた。すると、ふと主人は、こんなことを言い出した。

「どうだ、ふたりで旅へ出ることもめつたにない。一日帰りを延ばして、久しぶりにどつか近くの東  
海道でも歩いてみようじゃないか。」

私は、はじめ、何をこのいそがしい中に主人が言うのかと問題にしないつもりでいたが、考えてみ  
ると、もうこの先、いつの日にも、いつまた來られる旅かと思つと、主人のことばに動かされて來た。  
「そうですね。じゃ、まあ、ほんとに久しぶりに行つてみましょうか。」

と答えた。私たちは翌朝汽車で桑名へ向かうことにした。

朝、ホテルを出発しようとする時、主人に訪問客があつた。小松という名刺を見て、主人は心あた  
りがないらしく、ボーイにもう一度身もとを聞かせた。するとボーイは、

「なんでも、昔東海道でよくお目にかゝつた作樂井のむすこと言へば、おわかりでしょうとおっしゃ  
います。」

主人は、へやへ通すように命じて、私に言つた。

「おい、昔あの宇津できみも会つたらう。あの作樂井のむすこださうだ。苗字は違つてゐるがね。」

はいつて來たのは洋服の服装をきちんとした壯年の紳士であつた。私はほとんど忘れて思ひ出せな  
かつたが、あの作樂井氏の人なつこい目もとがこの紳士にもあるような氣がした。紳士ははいねいに  
礼をして、自分がこの土地の鉄道関係の会社に勤めて技師をしているということから、昨晚、クラ  
ブへ行つて、ふと、亡父が生前に始終その名を口にしていたその人が、先ごろからこの地へ來てNホ  
テルに泊つてゐることを聞いたので、さっそく訪ねて來たてんまつを簡潔に述べた。小松というのは  
母方の実家の姓だと言つた。かれは次男なので、その方に子がないまゝ、実家の後をついだのであつ  
た。

「すると作樂井さんは、もうおなくなりになりましたか。それはそれは。だが、年から言つてもだい  
ぶにおなりだつたでしょうからな。」

「はあ、生きておれば七十を越えますが、一昨年なくなりました。七、八年前まで元氣でありまして、

あい変わらず東海道を往來していましたが、神経痛が出ましたので、さすがの父も、我を折って私のうちへ落ちつきました。」

小松技師の家は熱田に近い所にあつた。そこからは腰の痛みの軽い日は、つえにすがりながらも、笠寺観音から、あの附近に断続して残っている、低い家並みにまつ株がはさまっている旧街道の面影を尋ねて歩いた。これが作樂井をして、小田原から横浜市へ移住した長男のうちに、かゝるよりも、熱田住みの次男のうちへかゝらしめた理由なのであつた。

「私も時々父に付き添って歩くうちに、どうやら東海道のおもしろみを覚えました。このごろは休暇ごとに必ず道筋のどこかへ出かけるようにしております。」

小松技師は、作樂井氏についていろいろのことを話した。作樂井氏も晩年には、東海道ではちょっと名の賣れた画家になつて、表具や建具仕事はしなくなつたことや、私の主人に、まだその後街道筋で見つけた、参考になりそうな事物を教えようとて、作樂井氏が帳面につけたものがあるから、それをいずれば東京の方へ送るといけようということや、作樂井氏の腰の神経痛がひどくなつて床についてから、同じ街道の漂泊人なかまを追憶したが、ついに終りをよくしたものがなく中にも、私の主人だけはずるくて、途中で街道から足を抜いたため、珍しく出世したと述懐していたことやを述べて、主人をさん／＼に苦笑させた。話はつい長くなつて十時ごろになつてしまつた。

小松技師は帰りしなに、少し改まつて、

「実はお願いがあつて参りましたが、」

と言つて、しばらく黙つていたが、主人が氣さくな顔をしてうけているのを見て安心して言つた。

「私も、いさゝかこの東海道を研究してみましたのですが、御承知の通り、こんなに、自然の変化も、都会や宿村の生活も、名所や旧蹟も、うまく配合されている道筋はあまりほかにはないと思うのです。で、もしこれに手を加えて、残すべきものは残し、新しく加うべき利便はこれを加えたなら、將來、みごとに日本の一大観光道筋になろうと思ひます。この仕事は、どうも私には荷が勝つた仕事ですが、いづれ勤め先とも話がつきましたら、専心この計画にかゝつて、私の生涯の事業にしたいと思ひますので。」

その節は、亡父のよしみもあり、東海道愛好者としても、くれぐれも一臂の力を添えるよう、主人に今から頼んでおくというのであつた。

主人が、「及ばずながら。」と引き受けると、人なつこい目を輝かしながら、しきりに感謝のことはを述べるのであつた。そして、これから私たちの行く先が桑名見物というのを聞き取つて、

「あすこなら、私よく存じている者もありますから、御便宜になるよう、すぐ電話で申し送っておきましょう。」

と言つて歸つて行つた。

小松技師が歸つたあと、しばらく腕組みをして考えていた主人は、私に言つた。「憧憬というなみは変わらないが、親と子とは、その求め方の方法が違つて来るね。やつぱり時代だね。」

主人のこのことばによつて、私は、二十何年前、作樂井氏が常に希望を持つために、憧憬を新しくするために、東海道を大阪までのぼつては、また、発足点へもどつて、これをくり返すという話を

思ひ出した。私は、

「やっぱり血筋ですかね。それとも人間はそんなものでしょうか。」  
と、言った。

汽車の窓から伊勢路の山々が見え出した。冬近い野は、農家の軒のまわりにも、田のあぜにもだいこんがっぱい干されている。空は玻璃のように澄みきって日は照っている。

私はからだを車体に揺られながら、自分のように平凡に過ごした半生の中にも、二十年となれば何かその中に、大まかに脈をうつものが氣づかれるような氣のするのを感じていた。それはたいては縁もない他人の脈ともどこかで触れあいながら。私は作樂井とそのむすこの時代と、私の父と私たちと私たちのむすこの時代のことを考えながら、急ぐ心もなく桑名に向かっていた。主人はこゝろよげに居眠りをしている。少し見を出したつむじの白髪がはねて光る。

〔老妓抄〕所収「東海道五十三次」

## 國語學習の手引

次に掲げたものは、各課の教材を学習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を發表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい学習を進展させて行つてほしい。

# 國語學習の手引

## 一 藤村詩抄

(1) 「自序」について、次のことを調べる。

イ 「新しき詩歌の時は來たりぬ」の「新しき詩歌」とはどういう詩歌か。

ロ 「あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり」の「西の詩人」について。

ハ 「新しきうたびとの群れ」とは、どういう人たちか。

ニ 「近代の悲哀と煩悶」について。

ホ 「新しきことばは即ち新しき生涯なり」とは、どういう意味か。

ヘ 「藝術はわが願ひなり。されどわれは藝術を軽く見たりき。むしろわれは藝術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。」によって作者の藝術観を見る。

(2) 一つ／＼の詩の特色(表現、感じ方、見方、比喩など)について話し合う。

(3) 次のことについて考えてみる。

イ 「あけぼの」の雲・空・水・草のどういふ点に作者は心をひかれているか。

ロ 「秋風の歌」において、作者は秋風をどううたっているか。

ハ 「わしの歌」の二羽のわしは何を象徴しているか。

ニ 「千曲川旅情の歌」には、作者のどういふ生活が表現されているか。

ホ「労働雑詠」に、作者は農夫の生活をどう表現しているか。

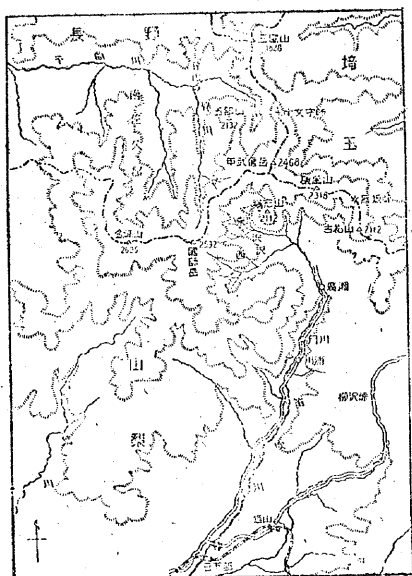
(4) 好きな詩一つを選び、朗読をくふうする。

(5) 好きな詩一つを選び、読後の感想を書く。

(6) 自作の詩を発表して話し合う。

## 二 笛吹川をさかのぼる

(1) 地図によって、作者のたどった道を調べてみる。



(2) 作者は笛吹川のありさまをどう形容し、どう表現しているか。次の三つに分けて書きとめる。

イ 甲府平の笛吹川    ロ 廣瀬村附近の笛吹川    ハ 東沢

(3) 作者が自然を形容している次のことばを本文に即して話し合う。

イ 音楽的な調和    ロ 音楽的情調    ハ 音楽的諧調

(4) 次のところの表現について理解を確かめる。

イ「かつて中村君、木暮君と金峰山から雁坂峠までを縦走した時」

——作者は初期の山あるきや溪谷の旅を、ふたりの友人、山岳画家中村清太郎、登山家木暮理太郎とともにしている。金峰山から雁坂峠への旅は、大正二年五月に行われている。

ロ「かのギリシア人のいゆる前生の愛の昔にたちかえろうとする執念さ」

——ギリシアの哲学者プラトン (Platon, 427 B.C.—347 B.C.) のエロス (Eros) の説にもとづいている。プラトンは「ファイドロス」という対話編の中に、この現象界に生まれて来ない前の人間の靈魂の状態を描いているが、靈魂は最初イデアの世界に住んでいて、清そのものの状態であった。この世に生まれてきた靈魂は、いやしい肉体に宿っているが、ふとした機会に忘れていた前生のイデアの世界を思い出す。ことに、前生に愛し合っていた靈魂にめぐりあった時などは特にそうである。同時に、今はたゞひとりさびしく、はかない影像の世界である現世にさまよっていることを悟って、イデアの世界を慕い求めるのである。

ハ「こういう際に、私たちは、十分な食糧を持っていなかったら、第二の大黒茂谷の悲劇を演じたかも知れない」

——作者は友人中村清太郎とともに、明治四十五年三月三十一日、奥秩父の大菩薩峠より柳沢峠に至る間にある大黒茂谷で、食糧欠乏と寒氣とのため危うく凍死しようとし、山人に発見され助けられたことがある。

(6) この課の「読後の感想」を書く。

(7) めい／＼の紀行文を作って発表する。

### 三 太郎 冠者

(1) 今までに読んだ狂言をもととして、狂言を研究する。(次の各項はその手がかりの一例である。)

イ いづごろから行われているか。

ロ どんな登場人物が多いか。

ハ どんな特徴があるか。

ニ どんな作品があるか。

(2) 「冠者」「太郎」ということばの意義の変遷を調べる。(中等國語二(四)六「意味の変遷」を参考にする。)

(3) 人間以外のものに用いられている「太郎」について話し合う。

(4) 作者が英語の例であげている「ジョン」「ジャック」の用法を整理し、「太郎」の用法と比較する。

(5) 次のことについて説明ができるようにする。

イ 頼りだ人    ロ シテ    ハ アド

(6) 狂言「萩大名」の原文を読み、そのおもしろさを味わう。

### 四 記録映画の幻想性

(1) 次の二つの敘述を中心にして、映画藝術の特性についてまとめてみる。

イ 私は自然というものの精神を、われ／＼人間に感受させる点において、映画藝術ほど偉大な技術はないとかね／＼信じているが、(それはとうてい言語藝術即ち文学の及ぶ限りでない。)

ロ 思うに、映画藝術の魔術のからくりの一つは、案外、映画の持つ機械性の中にひそんでいるのではあるまいか。

(2) 「はてしなき廣野のはてにつらなる山脈のかすかな影は、不思議にも私にある無常感というか、諦観というか、——ある寂寥を與えたのである」という作者の感じ方について話し合う。

(3) 次のところの表現について、理解を確かめる。  
イ ボールヴァレリーのことばをもつてすれば、さまざまの價値の生産が、さまざまの鑑賞者のうちにおいて営まれるわけである。

——ボールヴァレリー(Paul Valéry)はフランスの詩人。その詩論は世界各國の文学者に大きな影響を與えている。

ロ キャンメラがシュートした被写体——シュート(shoot)は映画の術語で「撮影する」の意味である。

- (4) 劇映画と記録映画との違いを話し合う。
- (5) 次のことばについて説明ができるようにする。  
イ ロケーション      ロ キャメラマン      ハ セット      ニ 監督

### 五 東海道五十三次

- (1) この小説について次のことを読みとる。  
イ 小説中に出てくるおもな人物の性格。  
ロ それらの人物（主人公・夫・作樂井・小松技師）の東海道に対する感じ方。  
ハ 時の流れとともに変化していく東海道の文化的意義。
- (3) 次のことについて説明ができるようにする。  
イ 夢川師宣      ロ 連歌      ハ 宗祇      ニ 默阿彌      ホ 許六      ヘ 竹斎物語  
「次の文や語句を読んで、それらの間に答える。  
イ「成功」などということばが特に取り出されて流行し、娘たちはハイカラまげという洋髪を結っている時代。  
(問) いづごろか。  
ロ「ありたけの魂をすっかり投げ出して、どうでもしてくださいと言いたくなるようなさびしさですね。」  
「この底に、ある力強いものがあるんだが、まあ、きみは女だからね。」

- (問) 自然に対する夫妻の感じ方はどう違うか。  
ハ「憧憬というなかみは変わらないが、親と子とは、その求め方の方法が違って来るね。やっぱり時代だね。」  
「やっぱり血筋ですかね。それとも人間はそんなものでしょうか。」
- (問) 作樂井父子に対して夫妻はそれ／＼どんな感想を持ったか。
- (4) この小説の構成・表現について話し合う。
- (5) 東海道を題材とした文学について研究する。
- (6) 作者岡本かの子について調べ、その作風を話し合う。
- (7) 島崎藤村の「千曲川旅情の歌」田部重治の「笛吹川をさかのぼる」津村秀夫の「記録映画の幻想性」岡本かの子の「東海道五十三次」にあらわれている作者の自然観をそれ／＼比較する。

昭和二十二年三月十二日 刷  
昭和二十二年三月十六日 刷  
昭和二十三年十二月十三日 修正三版刷  
昭和二十三年十二月十七日 修正三版刷  
昭和二十三年十二月十七日 交部省検査済

高等國語 一上  
昭和二十四年度用第一次刷  
定價金拾參円七拾錢  
(電引拾四錢)

著作權所有 文部省  
發行者兼

發行 東京都千代田区神田岩本町一番地  
教育圖書株式會社  
代表者 小松謙助

Approved by Ministry  
of Education  
(Date Dec. 13, 1948).

印刷者 東京都新宿区市谷加賀町一丁目十二番地  
大日本印刷株式會社  
代表者 佐久間長吉郎

發行所 教育圖書株式會社

